

ニュー・ラナーク巡検

井内 昇

スコットランドのニュー・ラナーク行が実現したのは偶然である。エジンバラ大学地理学科訪問が帰国直前に追加され、そこで偶々同行をすすめられた一日巡検の行先が此処だったというわけである。

ニュー・ラナーク。この小さな村は、イギリスのユートピア運動に関心を持つ者なら、一度は訪れてみたい場所であろう。サン・シモン、フーリエと共に、エンゲルスが「偉大な空想家」と名づけた3人の1人であるロバート・オーエンは、ここに建設されることになったスコットランド第一の大紡績工場の共同経営者として、ここに職住近接のユートピアをデザインし、人道的な労務管理を導入して、社会改革の理想の実現が夢ではないことを証明してみせたのである。

5月13日、指導教官アダムス講師以下40余人の学生を乗せた大型バスは大学を出発し、有名なロイヤルマイルを経て一路西へスコットランド低地の丘陵地帯を走る。バスの中では、車窓に展開する街や村の景観をとらえてアダムス講師のレクチュアが切れ目なく続く。しかし、学生は、と見れば、熱心に聞いているのは5～6人で、メモをとる学生は皆無といってよい。大多数は雑談かうたた寝である。約2時間後、クライド川の緑の谷間に目的の村が見えてきた所で下車、谷の斜面を歩いて下り、工場と住宅群を一望する場所で、アダムス講師がオーエンの業績やこの村がイギリスの産業革命の進行の中で演じた役割について熱弁をふるう。しかし、学生たちの反応は相変わらず鈍い。途中、一人の女子学生が脳貧血で倒れる、というハプニングもあって、レクチュアは1時間位で終了。観察のポイントについての指示が与えられ、学生たちは三々五々、村の中へと散って行った。

一息入れて汗を拭いているアダムス講師に、「大変興味ある話だった。しかし、学生たちはこういうテーマに余り関心が無いようだが……」と話しかけてみる。「学生だって？ 彼らは lazy ですよ。いや、lazy なんてものではない。彼らは“ダフト”ですよ！」というのが返事である。後で辞書をひいてみたら、「daft」：(スコットランド俗語)。馬鹿、間抜け。」と書いてあった。

エジンバラ大の巡検は、この種の一日巡検が毎年数回行われる他、1年生はスコットランドで5日位、2年生はイングランドで8日位、4年生はヨーロッパ大陸で10日以上(1980年はイタリアで2週間とか)、それぞれ行われるという。3年生はフィールドサーベイ技術の修得を目的とした巡検を地元で行うそうだ。

巡検先の多様さもさることながら、巡検費用のかなりの部分を大学が補助する、という点も羨しく感じた。斜陽の国、などと馬鹿にしてはいけない。(大学予算の9割は国費である)。

ニュー・ラナークの工場村は18世紀末に建設され、最盛期には2,500人の労働者とその家族が住みついていた。この紡績工場の一部は1968年まで操業していたというが、6階建の工場の建物を始め、隣接する労働者住宅群、協同組合売店や保育所、成人教育のための「人格形成学院」、児童のための「ロバート・オーエンスクール」などは180年の歳月を経て考朽化し、村は一時無人と化したらしい。それを、近年の歴史的遺産の保存や古い建築物の再生利用の一環として再び人の住む村として生き返らせ、併せて観光資源としても利用しようという目的で、目下村全体の修復が進められている。すでに一部の住宅に新しい住民の顔がみられた。